

10年目の転機

福島 桂子

勤務助産婦(鳥取市)

私はいつも「助産婦って、本当にいい仕事だよー。私の天職だよー」と誇りを持って言っていました。その言葉にはお産を少しでも変えていくんだという意欲を込めていましたが、少し気負いすぎたのでしょうか。この10年は自分の中の助産婦像と組織の中で働く助産婦の仕事のズレに悩み考え続けました。

助産婦になろう

生まれたての赤ちゃんを初めて見た衝撃は今でも鮮明に覚えています。私が小学校2年生の時に生まれた弟。助産婦さんに抱かれた弟の小さな手に触れ、頭に触った時、何ともいえず嬉しかったものです。赤ちゃんの不思議なパワーは人の心を揺さぶり、生命力を湧き起こすように思います。私は飛び上がって、大声で、体中で喜びを表現しました。これが、私と赤ちゃんとの最初の出会でした。

看護学校卒業後は、そのまま大阪の病院での就職を決め、周産期病棟への配属を希望しました。そこは、産科がNICUを管理しており、私はそのNICUに勤めました。分娩から退院まで経過を追って新生児をみることができ、妊娠や分娩がストレートに児の予後に影響を与えることを強く感じました。また、妊娠や分娩のことをよく知った助産婦がNICUにいたら新生児の看護も変わるのではないか、などと考えながら働いていました。

循環器系の専門病院でしたので、母体や胎児に何らかのリスクを持つ妊産婦がほとんどで、分娩は完璧に管理されていました。そんな中、助産婦

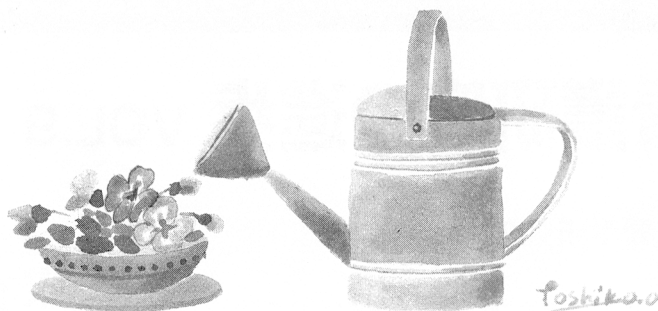
の働きぶりは、ちょっと違っていたのです。産婦と関わるその姿勢、ケアの手、的確な判断。「こんないい仕事はない」と思わせてくれました。私は「助産婦になろう!」と決意を固めました。

ジレンマ

今にして思えば、その先輩助産婦さんも、管理されすぎたお産にジレンマを感じながら仕事をやっておられたと思うのです。私の現在働く病院も、その病院程ではありませんが管理分娩で、「自然」という言葉は禁句といった感じを受けることさえあります。現在の医療の進歩そのままに手を加えた妊娠・分娩であり、留まることはありません。

妊娠や出産は人生の中の自然な営みの1つではありますが、その経験によってその人の人生が大きく変わることも事実です。納得できないお産はその人の心の傷として残り続けます。もちろん生育歴や考え方も関係しますが、産後の精神不安定や育児上の様々な問題が起きるきっかけの1つとなっているように感じるのです。もっと産婦が主体性を発揮できるお産をしなければと思います。しかし、そう変えていけない自分の弱さと、持って行きようのない怒りに焦ります。私の勤めているこの病院が助産婦に求めているものは何だろう。自分の中の助産婦像が崩れていくようでした。

管理されることによる安全ではなく、自分の妊娠やお産について考えられ、自分で安全なお産を勝ちとることができるよう妊婦を育てること。そのことにまず力を注ぐことが大切だと思います。



子育てとの両立

この10年で私も結婚し、現在4歳の娘と2歳息子の母です。私は三交替勤務をしていますので、子供たちは保育園に通い、夫の活躍あつての生活をしています。

このところ、私の仕事も忙しさを増し、子供と過ごす時間がめっきり少なくなりました。誰しもがぶつかる「仕事と家庭の両立」に、私ももれなく突き当たりました。助産婦は私にとって辞めることのできない仕事。でも、子供にとって今のような生活でいいのだろうか。母親とゆっくり過ごすことがなく、1日のほとんどを保育園で過ごすのです。べったり一緒にいなくてもいいけど、こんなに偏っていいのだろうか。

先日、保育園の発表会がありました。歌や合奏、劇など、どの子もいきいきとしています。私の子供たちも舞台の上から親を探しながらも一生懸命に頑張っていました。明るく元気に大きくなった子供たちにとって、私との時間の少なさは関係なかったのかもしれませんが。今のままでも変わらず大きく育ってくれると思います。でも私自身は、こんな形の子育ては望んでいなかったし、もっと子供に関わって生きていきたいと思いました。子供のためではなく、自分のために。

次へのステップ

病院助産婦としてののがゆさ、家庭と仕事との両立、いったいどうしたら自分が納得した生き方ができるんだろう。悩んだ末に出した答えは、

「退職」でした。

助産婦としてはまだ駆け出しで、これといったものもないまま無謀な結論だったかとも思います。しかし、病院ではない場所でも助産婦の仕事を活かしていけると思ったのです。鳥取市は残念ながら分娩を扱う開業助産婦はいません。地域の助産婦活動といえば年輩の助産婦さんの新生児訪問と分娩を扱わない助産婦さんがおられますが、その活動はあまり知られていません。まだまだ開拓の余地のある分野です。子供や青少年への性教育、両親学級の充実、乳房の継続管理、育児相談など、やれそうなこともいっぱいあります。でも、いったいどうやって進めていったらいいの？

退職は決めたものの、先の見えない道に不安も募ります。でも、あんまり考え過ぎず、まずは先輩方のやってこられた新生児訪問からやってみよう。急がず子供たちとの時間をとり戻しながら少しずつできることを広げていきたいと思います。

退職することを告げるといろいろな方が「もったいない」と言って下さいました。それ程、世の中の人たちは助産婦の仕事を認め、応援してくれているんだと思いました。私は、助産婦を辞めるのではない。続けていきます。

いつか鳥取の地でも、地域で働く助産婦の仲間の輪が広がっていくと思います。それを願って、そしていつかまたお産をとりたい、今はそんな心境です。肩の力を抜いて焦らずやっていきます。

次は助産婦学校の同級生、田中智子さんです。自分の思うまま個性的に生きていく彼女は、いつも私を楽しませてくれます。